

優秀演題抄録

9 離床拒否がある症例に対し集団活動を通じた関わり

【演 者】嶋田 真依 【所 属】石岡循環器科脳神経外科病院

【共同演者】原田 高德（作業療法士）、菊地 由希子（作業療法士）、関 聡（作業療法士）

【キーワード】集団活動

【はじめに】

今回離床及びリハビリテーション(リハ)に拒否的な言動がある症例に対し、集団活動を通して個別リハやフロアでの様子に変化が見られたので報告する。発表に際して症例とご家族に了承を得ている。

【症例紹介】

A 氏、84 歳男性、脳梗塞。左片麻痺中等度、認知症、注意障害。性格は怒りっぽく頑固。職業は農家。木工が得意。リハに対する拒否も強い。

【集団メンバー】

B 氏、78 歳男性、出血性梗塞。左片麻痺重度、認知症。性格は控えめ。C 氏、80 歳女性、脳内出血。右上下肢軽度運動失調、認知症、注意障害。性格は明るくお話し好き。A 氏の妻とは親戚関係で A 氏とも顔見知り。D 氏、83 歳女性、脳梗塞。左片麻痺軽度。積極性に欠ける。

【初期評価(初日)】

N 式老年者用精神状態尺度(NM スケール)：8 点、N 式老年者用日常生活活動能力評価尺度(N-ADL)：15 点。

【介入内容】

期間：X 年 8 月 8 日～X 年 10 月 14 日、時間・頻度：30 分/週 3 回。第一期：革細工(8 月 8 日～8 月 22 日)、第二期：折り紙細工(8 月 24 日～10 月 14 日)

【経過】

第一期：作業開始するも A 氏は自発性が乏しく、促しや介助が欠かせない。スタンプングが始まると、手慣れた様子で木槌を操作しており、集中して取り組んでいる。回数を重ねる毎に集合場所で待機するなど積極的に参加するようになる。表情も穏やかになり、メンバーと会話を楽しむようになる。第二期：革細工での達成感もあり初回は参加するも、巧緻性を要求される活動のため徐々に不参加となる。参加する日もあるが、手順を覚えられず途中で諦めてしまう。「女がやるものだからやりたくねえ」といった発言も聞かれる。穏やかであった表情が再び強張ってしまう。会話もこちらからの問いかけに稀に反応するだけである。

【再評価(8 月 22 日)】

NM スケール：15 点、N-ADL：21 点

【最終評価(10 月 14 日)】

NM スケール：11 点、N-ADL：17 点

【考察】

木工が得意であった A 氏に対し、革細工を個別リハで行おうとするも、拒否的でうまくプログラムを遂行することが出来なかった。そこで、同内容をパラレルな集団にて行った。始めは乗り気ではなかった A 氏が C 氏の誘い、他者から称賛されることにより拒否なく参加するようになった。しかし、活動内容が変わり、折り紙細工になると以前の様に拒否的な言動が増え、徐々に不参加となった。NM スケール N-ADL 共に点数は下がり、集団活動開始前と同様な状況となった。知人である C 氏の存在、称賛されることが正のフィードバックとなりリハへの意欲を引き出すことが出来た。逆に不得意な作業では、周囲から「私も難しいから大丈夫」等慰めの意見が多くなりうまくプログラムを遂行出来なかった。作業の選択の重要性を痛感するとともに、不得意な作業でも個人の能力が活かせる様な部分を見出すべきであったと反省した症例であった。